

モニタリング実施地および生物種の概況

- ・2024年の調査では、6団体による9か所のモニタリング結果を公開している。対象種は、各団体が注目し、定期的な観察、手入れにより見守っている種を任意に選定している。
- ・定期的・継続的な株の計数や観察を行うことが可能な植物を中心に、一部の鳥類や昆虫、魚類などについて今年の生育・生息状況が報告されている。
- ・植物はアマナやアズマイチゲ、ヒメニラ、ヤマエンゴサクなどの雑木林の環境を好む早春植物のほか、林床の明るさの変化や人による掘り取りによっても増減するキンラン、ギンラン、エビネなどの山野草に注目している。また、相模川の河川敷では地域を象徴する絶滅危惧種であるカワラノギクと、近年、地域固有の個体群であることが推定されるアザミ属の1種についても生育状況が記録されている。さらに、こうした植物と生育環境が競合する恐れのある特定外来種のオオキンケイギクやシナダレスズメガヤについてもモニタリングされている。
- ・この10年ほどの間に、度重なる台風の上陸・接近に加え、キアシドクガの大発生などの特異な事象、さらにここ数年注目されている、カシノナガキクイムシによるコナラの枯死など、長期的に見ても大きなエポックとなりうるイベントが複層的に環境へインパクトを与えており、その後の影響と思われるリアクションがこの5年ほどのモニタリング結果に表れており、今回もその後の経過といえる状況を読み取ることができる。
- ・自然界の生物の消長は人間の想像以上に振幅が激しく、1年ごとの増減で一喜一憂すべきではない。しかし、そうした年ごとの変化をとらえることをとおしてのみ、長期的な傾向を読み取ることができる。地域の特性、特色を把握することが生物多様性の基本であることから、今後もモニタリング調査を継続していきたい。また、現状では市内で活動する団体等をベースにモニタリングを実施しているが、今後は自然環境観察員制度との連携を模索するなどして、地域の自然環境を網羅的にモニタリングする方策を検討すべきであろう。

モニタリング結果の概況

- ・ヒメニラは最新(2022年)の神奈川県レッドリストにおいて絶滅危惧IB類とされ、神奈川県内では相模原市内にしか自生地は確認されていない植物である。中でもモニタリング調査が行われている境川斜面緑地においては安定的に多数の株の生育が確認されており、極めて重要である。調査では詳細な株数が記録され、樹林地の管理状況や他の植物との競合などによって増減があり、また群落がゆっくりと移動(走出枝で継代)する植物であることもわかってきた。今回の結果からは、調査地により若干の増減が見られるが、想定される年変動の範囲内と言える。ただし、一部地区では密度の低下が報告されているため、今後も継続して生育状況の把握が行われることが望まれる。
- ・アマナやアズマイチゲは境川の斜面緑地の他、木もれびの森や東林ふれあいの森などで詳細なカウントが行われている。エリアにより傾向の相違や、年ごとの増減はあるものの、

ここ数年は両種とも横ばい傾向にある。もともと株数が安定していても開花数の変動が大きい植物であるため、多少の増減は想定される年変動に納まるレベルといえる。また、それぞれの保全地で順応的管理に加え、その個体群の状況に応じた周囲の植生の管理等を行っているため、長期的には群落が維持されるものと考えられる。

- キンランやエビネは植生管理や、近年のキアシドクガによるミズキの枯死、ナラ枯れなどの要因によって林内が明るくなったことで、この4、5年は市域全体で開花株が増加傾向にあった。しかし、2021年の記録からは、増加傾向がやや頭打ちとなり、キンランについては2022年は若干の減少、2023年は場所によって半減し、2024年もその傾向がほぼ継続しているか、東林ふれあいの森のように若干の増加回復傾向もある。木もれびの森の一部では2022年をピークに減少を続けているが、ピーク時は異様なほどの数が咲いたことから、本来の生育状況に落ち着くものといえるだろう。これは、樹木の枯死などにより林冠にギャップ（開放空間）ができて明るくなったものの、その後、枝がギャップを埋めて再びふさがったか、または下草の繁茂により開花に適さない環境になった可能性もある。今後の推移を見守りたい。
- ヤマエンゴサクやヤマブキソウ、レンブクソウ、イチリンソウは緑区の山麓域以外では境川の斜面緑地に分布がほぼ限られる植物である。人による掘り取りなどの阻害要因は現状では確認できないが、周辺環境の変化により大きく株数が増減する傾向がある。特にヤマエンゴサクは株数が少ない上に消長が激しいことがモニタリング調査からもわかる。
- 今回の結果から、新たに上鶴間地区でワダソウがモニタリングされている点が注目される。本種は県RDBにおいて絶滅危惧IB類にランクされている。同地区ではかねてからごく狭いエリアで確認されていたが、株数はごく少数であり、近年の生育状況は不明であったが、2024年の調査で多数の株の開花が確認された。今後、継続的にモニタリングされることが望まれる。
- 古淵の境川斜面緑地では希少な蘚苔類であるコウライイチイゴケの生育が継続して確認されている。本種は宅地開発の前に確認され、開発の後も部分的に群落が残り、維持されてきた。県内での分布状況に不明な点も多いため、今後も継続的にモニタリングされることが望ましい。
- 境川沿いで繁殖期にアオバズクの鳴き声が毎年継続して聞かれているが、期間をとおして安定して記録されてはいない。鳴き声による確認がしやすい種類であるため、今後も確認状況を注視していきたい。
- カワセミは境川で安定して生息している一方、相模川上流域などでかつて確認が多かったヤマセミは、現在は非常に稀にしか確認できないことが報告されている。
- イワツバメは上流域の河川構造物などで集団繁殖が知られているものの、減少傾向にあること、オシドリも上流域のダム湖で確認されていたものの、近年は著しく減少していることが報告されている。
- 境川では魚類がモニタリングされており、中でも昨年に引き続き、ナマズが確認されてい

る点が注目される。